

好き嫌いを言う前に

西日本新聞那覇支局長

中西昌人



「沖縄を好きになるか、嫌いになるか。本土の人は、それはもう、はつきりと意見が分かれますから」福岡市から那覇市に越してきて三月で一年。当初、ウチナーの人たちから何度も脅しのよう
に聞かされた言葉がこれだった。いま、好きと嫌いの境目をふらふらと渡り歩いている。

好きからいえば、小さな道にも点在するパーラー。晴れた日、道ばたでバーガーをパクついていると、何とものんびりしてきて心地よい。

逆に夜の松山は苦手。若い客引きたちにとって、こちらはまるで「歩く財布」のよう。博多よりもひどいかも。一方、桜坂や泉崎界限は、昔話や世間話が楽しめる上に懐もさほど痛まない。

慶良間や先島のサンゴの海は本当に素晴らしい。さっそく水中メガネを買った。海に魅せられて、早くも入館者が百万人を超えた「沖縄美ら海水族館」もお気に入りの施設の一つだ。

ところが、那覇市内を流れる川はどうだろう。雨後のやんばるの川も真っ赤に染まる。本島の西海岸には自然のままの海岸は、もうほとんど残っていないとも聞いた。

食堂でほのかに響く島唄もいい。でも大音量の店では観光客もうんざりしていることだろう。

いつもは陽気でフレンドリーな米青年が、基地内では冷淡な兵士の顔に一変していたのに驚いた。嘉手納や普天間の爆音は想像していた以上にすさまじい。こんなにも良い印象、悪いイメージが、すぐ隣り合わせて混在している土地も珍しい。

仕事柄、役所にはよく足を運ぶ。自治体の規模に不似合いな大きな庁舎が多くないか。いまだき知事へのアポなし取材を認めない県にも面食らう。一方で、恐縮するほど熱心に対応してくれる職員がいる。

続けよう。いま話題の沖縄大学院大学構想。設立趣旨や意義に異論はなく、地域に与えるインパクトは大きいに違いない。でも、始まりが東京にいる前大臣の提唱とあつては残念な人も少なくないのではないか。

「これが沖縄からの独自の発案であつたならば」。自転車でもサーフィンでも、自力でテイクオフできた方がずっと面白いに決まっている。

そのためには権限移譲が不可欠だ。沖縄総合事務局が果たし

てきた役割が十分に大きいのは承知の上で、そろそろ年間三千億円規模の振興予算とともに、少しずつでもその役割を県や市町村に移してはどうだろう。

「アメリカ力世」から「やまと世」に戻って五月で三十一年。本土との格差の是正は進み、地元テレビ局の先輩の言葉を借りれば、かつての経済白書をもじって「もはや復帰でもない」。

こんな風に酒場でやいのやいのと言っていると、ウチナーの友から「バ・カ・タ・レ」と一喝された。

「たとえそうであつても、沖縄のことを本土の人が簡単に言うてはいけないよ。島は多いし、すべてを見たわけでもないのに判断しようとするのはヤマトの悪い癖」。

泡盛ですっかり盛り上がった場で無粋な仕事の話をするなどという戒めと、いったん思い込むと大事なことも見逃すぞという、沖縄の人ならではの温かな忠告であつたに違いない。

あと一、二年は、この街で暮らすことになるだろう。好きも嫌いもチャンブルーにしたままに沖縄と向き合おう。